

分析化学誌の位置づけ



菅原 正雄

編集委員長を仰せつかってほぼ1年が経過した。特集号の編集、審査をはじめとして、歴代の編集委員・事務局の皆様の多大な努力があって、順調に出版が行われ、毎号ほぼ一定の厚さを保つことができている。投稿される論文の内容は、実用分析の分野が圧倒的に多いが、選択性、感度、自動化、標準物質など分析化学のキーワードそのものが議論の対象となっている。母国語の日本語で書く論文のせいもあって、内容は大変密度の高いものが多く、研究者・技術者にとって重宝するものが多いと思われる。日本の多くの学会が出版している和文誌にIF値がつかないのが多いのに対して、分析化学誌にIF値(2011年IF値0.430)がついているのは誇ってもよいのではないかとと思われる。

私が数十年前、研究者の端くれとしてスタートした最初の論文は分析化学誌19巻に掲載していただいた。現在の巻数は62巻である。初刊以来約60年間にわたって出版が継続されてきたことになる。この間、分析化学誌を土台にして研究者・技術者として成長された方も多数おられると思う。近年は、往々にして英語の論文にこだわる研究者も多いが、分析化学の概念を厳密に表現するためには折に触れ母国語で書いてみるのも良いのではないのでしょうか。分析化学誌では「若手初論文特集」の企画がある。そこに掲載される論文の書き手である若手研究者が将来大きく成長し、分析化学の概念、分野を発展させてくださることを期待している。

分析化学誌に掲載される内容も、特集号の掲載内容をご覧いただければ判断できるように、分野が多様化し、異分野との融合を感じ取ることができる。普段は分析化学誌には投稿されていない方々からの投稿が増えてきていることも分析化学のすそ野が広がっていることを示している。そのせいもあり、学術用語や引用文献が分析化学の分野で育ってきた人々にはやや違和感があり、議論となるのが儘ある。しかし、これは過渡期にあるものとして理解し、他分野の研究者との相互のコミュニケーションによって乗り越えていかないとならないことでもある。

大学に身を置いて教育・研究に携わる者として、学生に分析化学をどのように教えるかは大きな課題である。時の経過とともに、新しい方法が登場し、ポーラログラフィーのように近年はほとんど扱われなくなったものもある。化学分析が中心の時代から多様な機器分析が主要な時代になり、さらには自動化が進んでいる今日、学生が将来それらを使用する研究者・技術者として成長する上で、限られた時間の中で何を学ばよいかを自問自答する日々である。分析化学会においても、アメリカ化学会、日本化学会のように、分析化学の教育に関する内容の論文も扱えることができるようになる日を期待している。

最後になるが、分析化学誌では、通常の報文、ノートのほか、総合論文、技術論文、アナリティカルレポート、テクノレポートなど多様なカテゴリーへの投稿・掲載が可能である。また、多様な特集を組んでいる。編集委員一同、皆様からの投稿をお待ちしております。

[Masao SUGAWARA, 日本大学文理学部, 「分析化学」編集委員長]